



月の光に照らし出された私の手のひらは、紙のように白かった。指先だけが熱を持って、赤ちゃんみたいに赤く染まつて。これがすべて真つ白になった時、私は死ぬのだと思った。息を吹きかけ、少しでも両手を温める。ああ、どうしてこんなに薄着で出てきてしまったんだろう。上着くらい羽織ってくれば良かった。

町の人々は、みな眠ってしまった。私は街灯のない、静かな町の大通りを歩いていく。今にも雲に隠されてしまいそうな、弱々しい月の光だけが頼りだ。歩道は石造りで、きれいに整備されているようだった。この暗い中を歩いて、つまずくことがない。時折、足の下で砂が音を立てた。ひとまず、今晩眠るための場所くらいは確保しなくちゃいけない。そう思っ歩いていくと、ほのかに明かりの灯った宿屋を見つけた。店の前まで行って、看板を覗き込む。

(まだだめ、お金が足りないわ。)

私が持っているのは、たったの二十五ダーハム。この宿屋で一晩泊まるのに、最低でも百二十ダーハムは必要だもの。今夜は、この近くで野宿することになるかもしれない。野宿なんて言葉を聞いたことがあるだけで、本当にやったことは一度もなかった。立ち並ぶ家の間にうずくまって、眠るくらいのことしかできない。

冷たい風が、服の裾から入ってきた。ぶるつと体を震わせ、

足の動きを少しだけ速める。こんな寒さで、一晩もつかしらは宿屋を離れて、住宅地の方へと歩き出した時だった。道の向こう側で、闇が動いたような気がした。だれ、と心の中でつぶやく。まだ、この時間に起きている人がいるの？ 人影は街路樹の陰に隠れて、すぐに消えてしまった。男か女かもわからない。気味が悪くなつて足を止めると、近くで砂を踏む音が聞こえた。手足が硬直する。

「やあ、今晩は。君みたいな女の子が、こんな夜遅くに歩いているのは感心しないね。」

男は私を見ると、流暢なラマニア語でこう言った。人形のようない肌。この辺りでは、あまり見かけない肌の色だ。一体、どこから来たのだろうか。年は、背格好からして二十代後半くらいに見える。頭の後ろで束ねられた長い髪は、銀に近い金色をしていて、青みがかった月の光に輝いていた。

「珍しい色の、髪をしているのね。」

私は、男の言葉をさらりと受け流した。男は、ああこれ、と言つて髪をなでる。そう、そんなに珍しい？ 星を詰め込んだみたいな瞳が、すつと細くなった。

「あなたは、旅人なの？」

私は、男の服に目をやる。白っぽくて柔らかそうな生地、タートルネックに、ゆつたりとした青色の上着。それと、ポケットのたくさんついたズボン。肩からは、大きめのシオルダーバ

ッグが下がっていた。私の質問に、男はこくりと頷く。

「そう、旅人だ。ついさっき、ここに着いたばかりだよ。」

それを聞いて、私は決心がついた。男が再度、口を開く。

「それで、君は——。」

「ねえ。」

私は、男の言葉をさえぎって言った。男の顔を見上げて、相手の目をしっかりと見据える。

「私を雇ってくれない？」

ヒュウ、と風が鳴った。数秒の間があつて、男の目が少しだけ大きくなる。

「僕に、君を雇えって？」

「そうよ。」

私は自信満々に答える。すると男は、「それは無理な相談だね」と言つて、私の横をすつと通り過ぎて行つてしまった。

「ちよ、ちよと待ちなさいよ！」

私は、慌てて男の上着の裾をつかむ。毛糸の柔らかな感触がして、服が少しだけ伸びたのがわかった。男は、うつとうしうに足を止める。

「放してくれないかな、伸びやすい生地なんだ。」

「私は、あなたの役に立てる自信があるわ。」

「申し訳ないけれど、僕には君みたいな子供を雇うお金はない。

他を当たってくれ。」

まったく相手にしようとしらない男に、私は早口でまくしたてた。

「私はナビーヴなの。治療のできる者。聞いたことくらいあるでしょ？」

「ナビーヴだつて？」

男が、興味を持ったようにこちらを振り返った。ナビーヴとは、ラマニア語で医師を意味する単語だ。私の国では、包帯を巻くなどの物理的な医療の他に、魔法に近い形の医療の開発が進んでいた。その治療法は、患者に手をかざすだけという、いたつてシンプルなもの。しかしその治療を行えるのは、ごく一部の限られた人間たちのみだった。

旅には危険が伴う。大した怪我でなければ市販の薬で治りはあるが、深い傷を負った場合は致命的だ。その場の状況によっては、命を落とすこともある。それに最近、なぜだかこの辺りでの医薬品の価格が高騰していた。魔法のように一瞬で怪我を治すことのできるナビーヴは、彼ら旅人にとって貴重には違いなかった。

（魔法、か。）

私は自虐的な笑みを浮かべる。きつとみんな、そう思つてのよね。あれは魔法だつて。物語に出てくる魔法使いみたいに、何の代償もなしに魔術が使えるって勘違いしてる。手をかざす

だけで、怪我が治るって信じてる。魔法なら、よかったのにね。ピシリ、と体のどこかで音がした。

「と、とにかく、残りの話は中へ入ってから聞こう。もう寒くなってきたしね。」

そう言われて、自分の体が冷え切ってしまったことに気が付いた。相手に言われるまま、先ほど通り過ぎた宿屋へと向かう。男の態度がガラリと変わったので、私は口の端をくつと上げた。滑稽だわ。ナビーヴだっただけで、こんなにも扱いが違う。私がただの子供なら、話なんて聞いちゃくれないのよ。

男が、宿屋の入り口に立った時だった。バアンと扉が開いて、小太りのおばさんが中から飛び出してきた。男が驚いて脇へ飛び退く。おばさんは私たちを見て、腹立たしげにため息をついた。ついさっきまで眠っていたのか、焦げ茶色の髪は乱れ、まぶたも半分くらい下がっている。

「お客さんかい？ すまないね、急患なんだ。悪いけど、その辺りで待っててくれないかい。」

少し南部訛りのあるラミアニア語だ。急いでしゃべっているせいもあって、かなり聞き取りにくい。

「急患？」

「ついさっき骨を折ったのさ。」

ぶつきらぼうな返答に、私は少しだけ苛立ちを覚えた。男は

気にしていないようで、のんきに相槌を打っている。それから私の方を向いて、意味ありげに目くばせした。「君がナビーヴなら、その人を治してごらんよ。」そう言っているような気がした。私は、今にも走り出しそうな勢いのおばさんと呼びとめた。

「その人を診せて。……私が、治すわ。」

足の骨を折ったのは、四十歳ほどの男性だった。よほど痛むのだらう、額に脂汗を浮かべている。彼の様子を見て、私は思わず足を止めた。後ろで見ていた男が、どうしたのと聞いてくる。おばさんは疑っているような目つきで、私を見つめていた。

大丈夫。これくらいは怪我なら、大したことないわ。私は軽く頭を振って、自分の弱い考えを追い出した。

（しっかりしなさい。意気地なしは嫌いよ。）

スウ、と息を吸い込んでから、患者に向かって両手を広げる。

私はその体勢のまま、静かに目を閉じた。



目を開くと、そこは見慣れた黒の世界だった。私たち、ナビーヴだけが知っている精神の世界。暗闇の向こうに、真っ黒な霧がうごめいているのが見える。なぜ黒い世界の中で、同じ色の霧が見えるのかはわからない。少しだけ、黒の密度が高いのかもしれなかった。私は、すたすたと霧のいる方へと歩いてい

く。次の瞬間、黒い霧が私の体を音も立てずに取り囲んだ。息が詰まる。少しずつ、少しずつではあるけれども、霧が薄くなっているのがわかった。

病は氣から、なんて言葉がある。実際のところ、あらゆる病氣や怪我は本人の氣力で治すことができるのだ。人の氣力、つまりは精神力を、私たちナビーヴは自然治癒力と呼んでいる。それではなぜ、人は病氣にかかるのか。それは、自然治癒力を下げる要因があるからだ。それは、その人が抱えている遺伝子的な問題だったり、肥満などの後天的なものだったり、いろいろだ。とにかく、たいいていの人はその「枷」のために、もともと備わっているはずの自然治癒力を下げている。だから私たちは、その枷を外す役目を担っているのだ。外すといっても、鍵のようなものがあるわけじゃない。自分たちの体に、一度その枷を取り込み、破壊するのだ。そうして、その人の自然治癒力を一瞬だけ元に戻す。それが、私たちナビーヴの力だった。

それにしても、今回の霧は手ごわい。なぜだろうか。これくらいは骨折治療なら、何十回もやってきたというのに。私は渾身の力を振り絞って、霧をはねのけた。霧が消えたと思った瞬間、ガクリと足の力が抜けた。地面に膝をつく。そのまま、私は氣を失ってしまった。